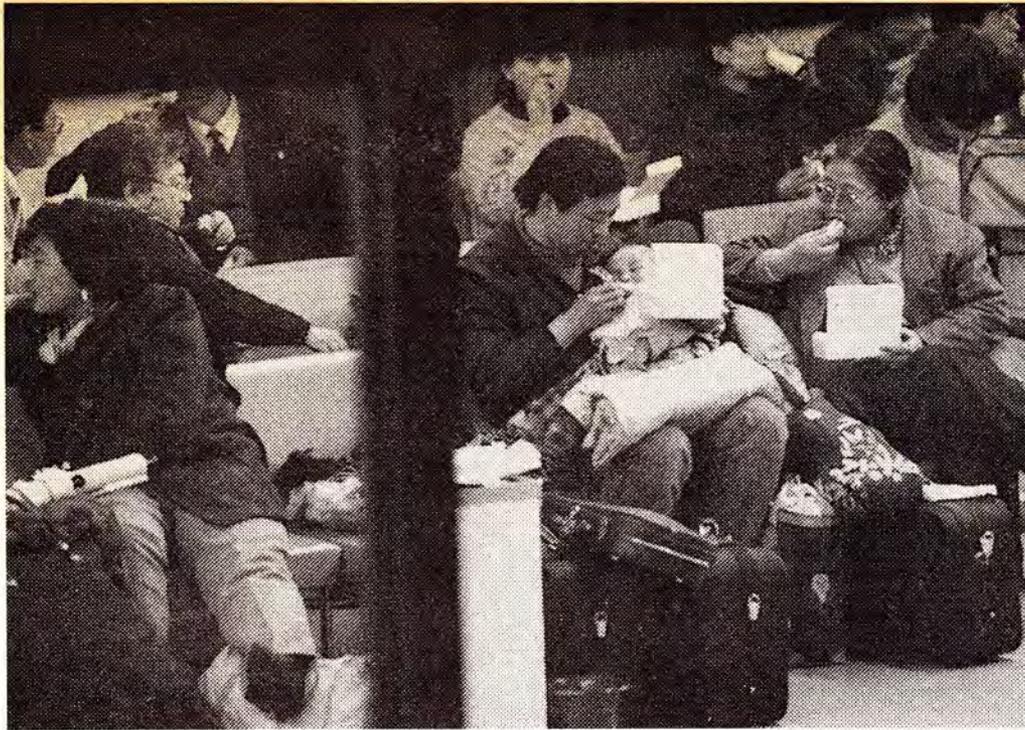


失業急増が引き金？

募る不満に出口なく



待合室の乗客には遅くなって食事が配られた—16日午後9時35分、福岡空港で



福岡空港の北側の一角に駐機した中国民航機
16日午後4時30分

【北京十六日―ワシントン特派員】北京発ニューヨーク行き中国民航航機「新大華」の乗客は、乗機乗取事件後、国内線の利用を認めている。しかし、六月四日の天安門事件後、利用者が激減、少しでも座席を埋めて、稼ぎたいという民

航の姿勢も、犯人の機内乗り込みにつながった一因といえる。当地では、今回の乗取りに、格別な思想的背景はないとの見方が強い。しかし、天安門事件後、「改革・開放」政策の挫折で、経済は厳しい引き締めが続き、失業が急増している。農村から都市へ出稼ぎに出てきた臨時労働者は、再び農村へ押し返されている。こうした農村の「余剰労働力」は五千万から一億人と推計される。また最近、経済計画立案に携わる中国の有力者が、西側外交官に「全国労働者・職員のうち一割は実際に何の仕事もない」と明らかにした。公式の数字には示されていないが、政府機関や各種企業に在籍する一億人のうち一千万人は、れっきとした失業者の群れだといわれている。

国内に金になる働き場所があれば別だが、それが無い。来日する「就学生」の例でも分かるように、彼らは機会があれば海外へ出稼ぎに行こうとする。香港でも台湾でも、どこでもい。ただ尋常的手段では、普通の中国人にとって出国はきわめて難しい。それにパスポートを取得すると、仕事を失うのが普通だ。そうした事情も「乗取」など非常手段に訴える要因となっているようだ。

近現代史の話。もともと中国はこの種の犯罪に対して銃殺など厳しい対応をとってきた。また天安門事件後の政治状況の中では、犯人が中国側に引き渡されれば厳罰が待っていることは、十分予想される。相手はハイスチャック犯だということを第一に考えて事態を処理するのは当然だろう。その大前提に立つたうえで、犯人が政治亡命を主張した時には、難しい問題が浮上してくるようになる。六・四以降、せっぱつまった「脱出願望」が、中国民衆の間には広がっている。それを実感できるだけに、やりきれない思いだ。

民民主化の逆行が原因
平松茂雄・杏林大学教授（中国軍事問題）の話。詳しい状況はよくわからないが、ハイスチャック犯人が中国の知識層の人だとすると、気持ちよくわかる。天安門事件以降、中国政治は急速に後戻りしており、特に軍は毛沢東時代の文化大革命にも似た状況になりそうな気配すらある。民主化を求めた学生、知識人にとっては、暗黒の時代ということになる。特に、一度、民主化が進みかけた後の、逆行だけに、逃げ出したい気持ちはいくらもあるだろう。

台湾との経済格差が広がる一方では、これからは台湾行きをめぐらした事件は多発するだろう。中国は十六日から人民元の為替レートを二％も切り下げた。日本、韓国、台湾などの差はこれで一段と広がった。今回の「乗取」は、今後、出稼ぎ難民の急増を予告するものかもしれない。

亡命求めれば問題に
野村浩一・立教大学教授（中国）の話。天安門事件以後、民

命しようとした四、五人の犯人が中国民航機に乗ったことが、逮捕され、銃殺刑となった。八八年五月十二日、福建省省毛イ発州行き中国民航機が中国青年二人に乗取られ、台湾の空軍基地に着陸した。二人は台湾への亡命を求めたが、同

中国機の主な乗取事件
八二年七月二十五日 西安発上海行き中国民航機が中国人五人に乗取られた。犯人は台湾へ行くよう要求、機内で小爆発を起こしたが、乗客らが取り押さえた。
八三年五月五日 瀋陽発上海

行きの中国民航機が六人の中国人グループに乗取られ、韓国への亡命を求めた六人は韓国で有罪判決を受けた後、台湾へ引き渡され、送還を求めているが中国は韓国政府に抗議した。
八六年八月下旬 香港紙の報道によると、遼寧省で韓国へ亡

衆の側からの抵抗はいまも強く、恐怖政治は続いている。台湾への亡命希望が事実とすれば、今回の事件はこうした中国の社会的背景と無縁ではないだろう。十一月下旬に、一週間ほど中国へ行き、天安門周辺で人民武装警察部隊が教練している様子などを見て、いまたにヒリヒリしている雰囲気がよくわかった。今の中国の状況を見ると今後も同じようなことが起きかねない。